

Dec. 1980

甲虫ニュース

COLEOPTERISTS' NEWS

No. 51

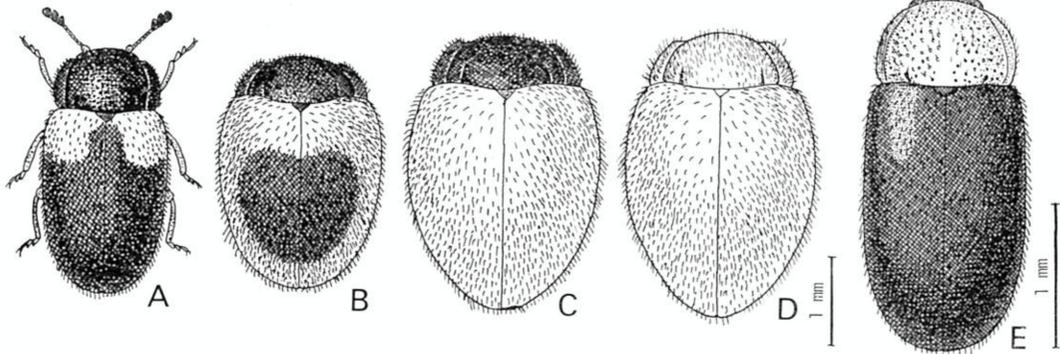
日本産テントウムシダマシ科概説 (3)

佐々治寛之

Genus *Ectomychus* GORHAM, 1887 ケブカテントウダマシ属

日本産の *basalis* を模式種として記載された属で、触角の第9・10節が甚しく内方に拡張すること、細長い体形によって、*Stenotarsus* から区別された。しかし、中条 (1938) は触角の形状と前背板側溝・横溝の形状を根拠に卵円形の *musculus* と

nigriclavis を *Stenotarsus* から本属へ移した。これらは前胸腹板突起が短いという共通の特徴からも支持されよう。その結果、体形は属の特徴とは出来なくなった。体の細い群と卵円形の群とは体形以外にも若干異なるので、亜属くらいには分けられるかもしれない。日本から4、台湾から1、インド~ビルマから4、アフリカから13、合計22種が記載され



第11図 A: *Ectomychus basalis* GORHAM カタバニケブカテントウダマシ; B-C: *E. musculus* GORHAM クロモンケブカテントウダマシ; D: *E. nigriclavis* GORHAM チャイロケブカテントウダマシ; E: *E. sakaii* CHÛJÔ et KIUCHI ムネアカケブカテントウダマシ (短いスケールはA-D, 長いスケールはEに適用)

ている。

日本産種への検索表

- 1(4) 体は細長く、幅の2倍又はそれ以上の長さがあり、両側はほぼ平行。
- 2(3) 前背板は黒色、上翅は黒色で基部に赤色斑がある *basalis* GORHAM
- 3(2) 前背板は淡色、上翅は黒色で無紋 *sakaii* CHÛJÔ et KIUCHI
- 4(1) 体は卵形で、長さは幅の1.5倍前後、両側は明らかな弧状。
- 5(6) 前背板は黒色、上翅は赤褐色地で中央に黒色の大形紋がある。稀に上翅黒紋は完全に消失することがある *musculus* GORHAM

6(5) 背面は全体黄褐~赤褐色

..... *nigriclavis* GORHAM

18. *Ectomychus basalis* GORHAM, 1887 カタバニケブカテントウダマシ (第11-A図)

特徴的な体形と斑紋で直ちに他から区別できる。体長: 2.3~3.0 mm。分布: 北海道, 本州, 九州, 対馬。当然四国にもいると思われるが具体的な記録が見当たらない。

19. *Ectomychus sakaii* CHÛJÔ et KIUCHI, 1974 ムネアカケブカテントウダマシ(新称) (第10-E図)

体形は前種に似るが色彩はまるで異なり、体長も2.0~2.5 mmと小形であるほか、より細長く、前背板側縁の縁取りがせまく、上翅の点刻がより明瞭な

ことなどで容易に区別できる。琉球列島(中之島, 奄美大島, 徳之島)に分布する。

20. *Ectomychus musculus* (GORHAM, 1887) クロモンケブカテントウダマシ(第11-B, C図)

この種も顕著な斑紋で一見して同定出来るが, 稀に上翅黒紋が消失し無紋となることがある。体長2.5~3.2mm。E. nakanei CHŪJŌ, 1941(奥多摩産で記載)は上翅無紋型と思われ, 手元にこれに相当する群馬県産の標本があるが色彩以外に差異は認められない。このような個体では次種との区別がまぎらわしくなるが, 前背板の点刻は上翅のより明らかに密であるが, 同様にこまかい。また, 前胸腹板突起の基節間部分は長さよりも幅が広い。本州, 四国, 九州に分布。

21. *Ectomychus nigriclavus* (GORHAM, 1873) チャイロケブカテントウダマシ(第11-D図)

黄褐~赤褐色で, 触角と肢が黒色。体長: 2.7~3.2mm。前背板の点刻は上翅のより明らかに密でかつ強い。前胸腹板突起の基節間部分は縦長。本州, 九州に分布。前種とともに, STROHECKER (1953)は中条の処置を認めず, *Stenotarsus*に残しているが, 上記のようにする方が良いように思われる。

Genus *Saula* GERSTAECKER, 1858 キイロテントウダマシ属

前背板側縁が幅広く隆起しないこと, 中胸腹板(中央部)が縦長の四角で両側が隆線有すること, 触角は長く, 各節とも縦長であるなどで特徴づけられ, いずれの種も前胸が暗化することはあるが, 背面は淡色で斑紋を持たない。現在までに24種が記載され, アフリカ産の2種以外はすべて東洋産である。日本からは次の1種が知られる。

22. *Saula japonica* GORHAM, 1874 キイロテントウダマシ(第12-B図)

体長3.0~4.0mm。背面は橙色(標本では黄褐色)で前背板はやや暗色。前胸はほぼ横長の長方形で, 上翅は卵形。北海道から九州まで広く分布するが, 中部以北では稀で, 西南日本では最普通種。

GORHAM (1873)は*S. nigripes* GERSTAECKER?として日本から記録したが, 翌年新種として上記のように命名記載した。クスの葉を食害するという記述があるが, 恐らく葉上から採集されたにすぎないと思われる。多くのテントウダマシ類がキノコや朽木で採集されるのに対して, この種は樹木生葉上に生息し, 幼・成虫共にカイガラムシ等を捕食している。特にヤノネカイガラムシの有力な天敵として注目されている(野原啓吾, 1963; 中尾舜一, 1964)。幼虫の形態については, 佐々治(1978)の報告があり, 一見, テントウムシ科の幼虫に類似が認められるが, 基本的形質については典型的なテントウダマシ科と相異しない。

Genus *Danae* REICHE, 1847 ダナエテントウダマシ属

前・中胸腹板の形状は前属 *Saula*によく似ているが, 前背板側縁部が幅広く平坦に隆起している点

で異なる。雄の触角球桿部はしばしば特異的に変化し, 種の特徴となる。68種が知られ, 北米から1種, アジアから13種, あとの54種はアフリカ産である。*Oediarthrus* GERSTAECKER, 1858, *Rhabduchus* GORHAM, 1873, *Coniopoda* GORHAM, 1873 はいずれも本属のシノニムとされる(ARROW, 1920)。日本から次の4種が知られているが, 再検討が必要のようである。

日本産種への検索表

1(2) 前背板側縁の平坦隆起部はほぼ平行で基部近くで狭くならない。触角の第9・10節は雌雄とも単純でほぼ同形, 長さは幅とほぼ同じ(第8-D図)。体は大きく4.5~4.7mm……………*shibatai* NAKANE

2(1) 前背板側縁平坦部は基方で明らかに狭くなる。体長4.5mm以下。

3(6) 触角第9・10節は雌雄ともに明らかに幅よりも長く, 第9節は第10節よりも明らかに長い, 雄の第9節は内方に明瞭な突起を有する, 先端節は幅の2倍以上の長さがある。

4(5) 雄の触角第9節は内方に鋭い棘状の突起がある(第8-G, H図)。上翅は赤褐色で, 前背板は黒褐色……………*denticornis* GORHAM

5(4) 雄の触角第9節は内方に横位の陵状突起がある(第8-E図)。上翅と前背板はほぼ同色で暗褐色。雄の後脛節内縁に長毛を密生する……………*castanca* SASAJI

6(3) 触角第9・10節は雌雄ともにほぼ同形で, 先方へ強く太まり, 長さよりも幅広く, 先端節の長さは幅の約1.5倍(第8-F図)。背面は黄褐色……………*orientalis* GORHAM

23. *Danae orientalis* (GORHAM, 1873) トウヨウダナエテントウダマシ(原色大図鑑107-14)

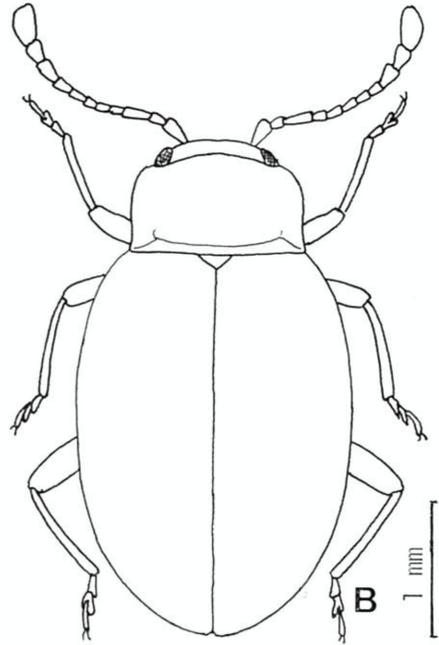
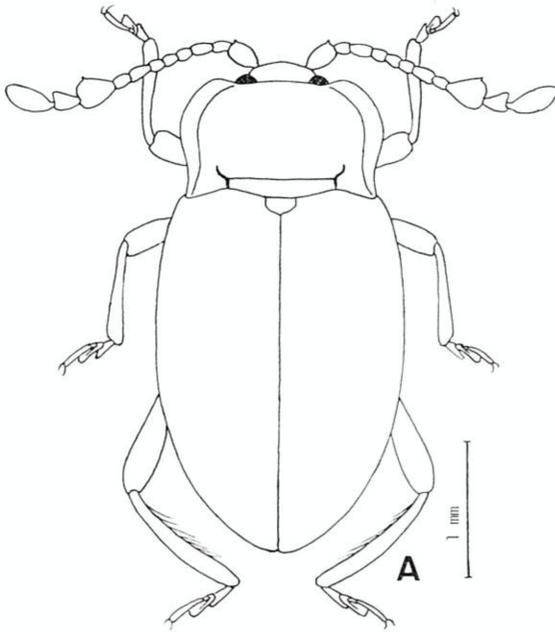
前背板が上翅と同じく黄褐色をすること, 触角球桿部が太短い点で他種と区別される。体長3.0~3.5mm。GORHAM (1873)は本種の記載にあたって, *Coniopoda*なる属を創設したが, *Danae*と区別するには及ばない。模式産地はHiogoで, 本州, 四国, 九州の各地から記録され, 手許に北海道産(足寄, 24—31. vii. 1959, 森本桂採集)があるので分布に加えておく。

24. *Danae shibatai* NAKANE, 1958 オオダナエテントウダマシ(原色大図鑑107-16)

標本を実検していないが, 検索表に示したような特徴で区別されよう。芝田太一氏が奈良で採集したものに基き記載されたもので, その後の採集記録を聞かない。和名は最初オオダナエテントウダマシとされたが, 次種と同名になるため, 上記のように改められた。触角が性的二形を示さない点で, *orientalis*と同じgroupに入るものと思われる。

25. *Danae denticornis* (GORHAM, 1873) オオダナエテントウダマシ(原色大図鑑107-15)

雄の触角第9節は極めて特徴的で, *orientalis*とは前背板の色や触角球桿部の形状で区別される。体



第12図 A: *Danae castanea* SASAJI カバイロダナエテントウダマシ; B: *Saula japonica* GORHAM
キイロテントウダマシ

長 4 mm 前後。(木内氏から拝借した本種の雌と思われる標本は 3.5 mm)。模式産地は長崎で、その後、奈良、対馬から記録されているが珍しい種と思われる。*Rhabduchus* なる新属のもとに記載されたが、現在は *Danae* に含まれている。

26. *Danae castanea* SASAJI, 1978 カバイロダナエテントウダマシ (第12-A図)

最近、長崎産の雄1頭の標本によって記載されたもので、体長 3.4 mm。検索表に示した特徴のほか、前背板前線の凹みが浅く、前角はゆるやかに丸まり、側縁の基部は強く波状。台湾産の *D. taiwana* CHÜJÓ, 1938 に酷似し、同種名で神谷が長崎から日本新記録とした標本に他ならない。真の *taiwana* は日本には産しないと思われる。

Subfamily EUMORPHINAE

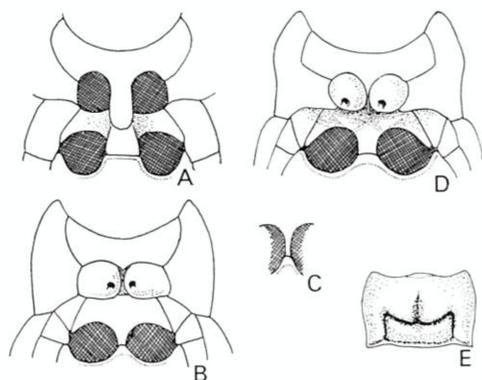
オオテントウダマシ亜科

前背板前縁の中央に横長半透明の発音膜があり、頭部の対応位置にある発音やすりとして発音器を形成する。下唇中舌は両側に拡がり、下唇ひげは太短かい。背面は無毛で、強い光沢のある場合が多く、熱帯産のものでは瘤状や棘状の突起があるものもある。一般に大形の種が多いが、日本産のものでは1種を除き、必ずしも大きくない。STROHECKER (1953) の体系では25属が含まれており、その後数属が追加され特に熱帯アジアに多くの属種が分布する。日本には4属が認められるにすぎないが、台湾まで足

を延ばすと一抛に13属となる。

日本産属への検索表

- 1 (4) 前胸腹板突起は極めて細く、前基節の後端を越えないため、左右の前基節は接する (第13-B, D)。
- 2 (3) 触角の第3節は第4節の2倍以上の長さがあり、球桿部はあまり発達しない。中胸腹板突起は広く、その先端は丸まった後胸腹板突起に接する (第13-D)。雌の前背板中央には顕著な彫刻がある (第13-E) *Ancylopus*
- 3 (2) 触角の第3節は第4節よりもわずかに長く、球桿部はかなり良く発達する。中胸腹板突起は狭く、その先端は突出した後胸腹板突起に接する (第13-B, C)。雌の前背板は雄と同様で特異な彫刻をもたない *Lycoperdina*
- 4 (1) 前胸腹板突起は広く、前基節の後端を明らかに越えて伸長し、左右の前基節は明らかに隔てられる (第13-A)。
- 5 (6) 触角の第3節は第4節よりもわずかに長く、第7節から第11節は徐々に幅広くなる球桿部を形成する。中胸腹板突起は幅より長、その両側は前方に狭まり隆線で縁取られる (第13-A) (6 mm 以下) *Mycetina*
- 6 (5) 触角の第3節は第4節の2倍以上の長さがあり、第8節までは細く、先端3節が強く拡張して球桿部を形成する。中胸腹板突起は横長で、両側はほぼ平行。(大形で 10 mm 以上)



第13図 A: *Mycetina amabilis* GORHAM キボンシテントウダマシ, 前・中胸腹板; B: *Lycoperdina castaneipennis* GORHAM クリバネツヤテントウダマシ, 前・中胸腹面; C: *L. dux* GORHAM フチトリツヤテントウダマシ, 中胸腹板突起; D: *Ancylopus pictus asiaticus* STROHECKER ヨツボンシテントウダマシ, 前・中胸腹面; E 同じく♀の前背板

.....*Eumorphus*
Genus *Lycoperdina* LATREILLE, 1807 ツヤテントウダマシ属

体形は細長く、前背板は長さよりも少し幅広く、背面は強い光沢がある。23種が知られ、旧北区に13種、その他は北米、アフリカ、マダガスカルに産し、1種は台湾まで分布する。雄の前脛節中央内側に突起をもつものは亜属 *Gorgia* MULSANT, 1846 として区別され、日本産3種はいずれもこの亜属に含まれる。属の模式種 *L. bovistae* (FABRICIUS, 1792) が最初 *Galleruca* 属として記載されたように一見ハムシを思わせる感じの虫である。この属のものは球形のホコリタケ類の中に生息する。

日本産3種は背面の色彩によって大いには区別可能であるが変異が多いので注意を要する。

日本産種への検索表

- 1 (2) 前背板の中央部と上翅の中央部は大きく黒色。前背板前縁の湾入は比較的浅く、前角はほぼ

直角。中胸腹板突起は中基節間においてほぼ平行。雄の前脛節内側中央の突起は鋭く歯状.....

- *mandarinea* GERSTAECKER
2 (1) 背面は中央部は暗化することがあっても明瞭な黒斑とはならない。前背板前縁の湾入は深く、前角は鋭角。
3 (4) 前背板の前縁、側縁、基縁両側部の縁取りは明瞭で完全。中胸腹板突起は中基節間において狭くほぼ平行。雄の前脛節内側中央は角ばって隆起する。上翅は長楕円形で、中央より前方で最も幅が広い.....*dux* GORHAM
4 (3) 前背板の各縁の縁取りは不明瞭で、特に前縁中央部、基縁両側部ではほとんど認められない、雄の前脛節中央は強く平たく突出する。上翅は卵形で中央付近で最も幅広い.....
.....*castaneipennis* GORHAM

27. *Lycoperdina* (*Gorgia*) *mandarinea* GERSTAECKER, 1858 セグロツヤテントウダマシ (原色大図鑑107-1)

細形の体形と特徴のある黒斑で、他の2種と容易に区別できる。体長 3.5~5.2 mm。模式産地は香港で、北海道、本州、四国、九州、トカラ群島、台湾、中国に分布する。

28. *Lycoperdina* (*Gorgia*) *dux* GORHAM, 1873 フチトリツヤテントウダマシ (原色大図鑑107-2)

背面は一様に赤褐色のものと、濃暗色で周辺部が赤褐色のものがある。体長は 5.5~6.0 mm。北海道、本州、四国に分布。

29. *Lycoperdina* (*Gorgia*) *castaneipennis* GORHAM, 1874 クリバネツヤテントウダマシ (原色大図鑑107-3)

背面の体色は赤褐色のものからほとんど黒色に近いものまで変異があり、体長 4.8~6.0 mm。前種に比べるとやや幅広いがよく似ている。前背板の形や縁取りの状態に明らかな差が認められ、中胸腹板突起の形状は顕著に異なる。なお、雄の前脛節の突起の状態はこの類の分類に重要である。STROHECKER (1970) は前種と本種の交尾器を図示し、同時に lectotype を指定している。

○クロサワヘリグロハナカミキリ 奥秩父の記録

クロサワヘリグロハナカミキリ *Eustrangalis anticereductus* HAYASHI は北海道から九州まで分布するが、関東では奥多摩、大菩薩でのわずかな記録があるだけである。筆者は埼玉県大滝村川又付近の花上で本種を採集したので報告しておく。

1 ♀, 埼玉県大滝村川又付近 (標高約1000m) 6. vi. 1980, 筆者採集。

末筆ながら御指導ならびに同定して下さい下村徹・鈴木互両氏に深謝する。なお標本は下村氏が保管している。

(東京農大, 松本俊信)

○キイロシリプトジョウカイの採集記録

キイロシリプトジョウカイ *Yukikoa wittmeri* (NAKANE) は大阪府能勢初谷と箕面で採集された標本に基づいて1963年に記載された種類であるが、稀な種類の様で、その後箕面と長野県上高地で記録されているにすぎない。筆者は下記の如く、福島県で採集しているので記録しておく。

1 頭, 福島県南会津郡松枝村船岐林道, 19. vi. 1980. 山崎裕志採集。

林道側のイタドリの上より採集したものである。いろいろお世話になった小野寛昭氏に深謝する。

(東京都世田谷区, 山崎裕志)

アオカミキリ備忘録(2)

黒沢良彦

(2) コバネカミキリモドキについて

コバネカミキリモドキ *Nothopeus hemipterus* (OLIVIER, 1795) は "Java" から *Cerambyx hemipterus* として記載された種類であるが、分布の主力はインド東北部からビルマを経てインドシナ半島に至る地域にあり、ジャワに産するのは疑わしい。1833年に SERVILLE は本種を模式種として属 *Colobus* を創設したが、この名は ILLIGER, 1800 により先占されているので、その代りに、1864年に PASCOE は *Nothopeus* を、続いて 1865年に THOMSON は *Coloborhombus* を提唱した。しかし、わずかの差で前者が先行し、本種の種名には最近では *Nothopeus* 属が用いられている。

台湾から本種を最初に記録したのは鹿野忠雄博士で、埔里社を記録した(1927)。次いで三輪勇四郎博士は "Kusu-kusu" を記録し(1931)、松下真幸博士は "Hori, Kuskus" を報じた(1933)が、後者のものは鹿野、三輪博士の記録を再録したもので、松下博士自身は「台湾産」の標本は検していないと思われる。1940年、水戸野武夫氏は「日本鞘翅目分類目録」第8集天牛科の中で、本種には*印を付し、台湾?としている。*印は凡例によると、「著者をして本邦領土内に産する可能性がないと信じせしめたものに対しては*印を註記しまとめて登載しておいたが、亜種または変種のみが分布するものは普通は排列せしめた。*または?印の種類は将来日本産天牛目録より削除してまず間違いがないと思料される種類である」とある。先にも記した通り、三輪博士を始めとする台湾在住の甲虫学者たちにはこの時点では「素木標本」の存在とその経過は知れていたと考えられるので、水戸野氏も婉曲にこの目録の中で「素木標本」に基づく誤った記録を指摘されたわけであるが、氏も中条道夫博士と同様にその判断を読者にまかせるかなり虫のいい態度に終始している。この点、理由を述べずに「素木標本」に基づくと思われる記録を全部一刀両断に削除してしまった三輪博士と好対照である。下って、GRESSITT 博士は上記の産地を再録し、その他に "One (C. A. S.) reputedly from viii-1931, KANO" として Arisan (阿里山) を産地に加えている(1951)。しかし、国立科学博物館に所蔵される鹿野標本の中には本種は全く見当たらない。恐らく、鹿野博士の報告された産地埔里にせよ、三輪博士のクスタスにせよ、共に「素木標本」に基づくもので、真の台湾産の標本はないと推定される。問題は GRESSITT 博士の報告したサンフランシスコの California Academy of Sciences にあるという「鹿野博士採集」の阿里山産の標本である。これも恐らく「素木標本」である

と考えられるが、それがどうしてアメリカにまで流れて行ったのかは謎である。鹿野博士の記録した産地は埔里であるが、その標本はいまは所在不明である。同博士は1931年に確かに台湾に渡り玉山(新高山)周辺を廻り埔里に出ているが、恐らく阿里山には登っていないと思われる。それなのに、なぜアメリカに同博士採集の阿里山産の本種の標本があるのであろうか。鹿野標本の中に本種の標本が見当たらないことに関連して、そこに何かミステリーじみたものを感じる。それはともあれ、本種は、水戸野氏が指摘した様に、台湾のファウナから抹消してよいであろう。

(3) アオカミキリの所属

アオカミキリ *Chelidonium quadricolle* BATES 1884の所属する属が *Chelidonium* THOMSON, 1864 であることに疑問を持った人はない様に思える。しかし、J. L. GRESSITT (1951, 1970) が提示した検索表によれば、*Chelidonium* 属は、1) 触角の末端節は一般に基方の数節よりは細く、後腿節は先端に向け次第にあまり急激に太まることはない点で属 *Ipothalia* PASCOE, 1867 と異り、2) 触角は細く暗色で、前胸は一般に長さが幅と等しいかまたはそれより長く、金属光沢があるなどの点で *Pachyteria* SERVILLE, 1833, *Nothopeus* PASCOE, 1864, *Zonopterus* HOPE, 1843, *Embriksstrandia* PLAVILSTSHIKOV, 1931 などの諸属とは異り、3) 触角は先方に向って細まらなく、稀に超えることはあっても一般に雄でも翅端を超えることなく、後腿節も一般に翅端を超えることはないなどの点でオオアオカミキリ属 *Chloridolum* THOMSON, 1864, ミドリカミキリ属 *Leontium* THOMSON, 1864, ジャコウカミキリ属 *Aromia* SERVILLE, 1833 などの諸属と異り、4) 前胸は側方に突起がある点で属 *Amphis* THOMSON, 1864 と異り、5) 前胸は長さが幅と等しいか、またはごくわずかに幅が広く、前縁と後縁に沿う横溝があり、翅鞘は後方に向って狭まり、体の長さは幅の4倍以下である点でキオビアオオカミキリ属 *Polyzonus* と異り、6) 後腿節は、雌では翅端に達するかそれを超し、雄ではしばしば翅端をはるかに超え、触角の基節は先端の外角が円く、前胸の幅は長さと同じか時にそれよりごくわずかに広い点で *Schwarzerium* MATSUSHITA, 1933, *Cataphrodisium* AURIVILLIUS, 1907, *Aphrodisium* THOMSON, 1864 などの諸属と異なる、などの諸点で他のアオカミキリ族 *Callichromini* の各属から区別される。そこで、日本産のアオカミキリ *C. quadricolle* をこれらの特徴に照し合せてみると、1), 2), 3), 4) および 5) の特徴では問題はないが、後腿節は雄雌共に

明らかに翅端に達することがなく、前胸は明らかに長さより幅が広く、この点でアオカミキリ属 *Cheledonium* THOMSON, 1864 の範疇には含まれない。従って、6) の特徴とは異なる 7) 後腿節は雌雄共に翅端に達することなく、前胸の幅は長さよりやや広い *Schwarzerium*, *Cataphrodisium*, *Aphrodisium* などの諸属のどれかに属すると思われるが、触角の

基節の先端の外角が円く、*Abhrodisium* や *Cataphrodisium* 属の様に鋭く棘状になっていない点で、台湾の *S. semivelutinum* (SCHWARZER, 1925) ただ1種を含む *Schwarzerium* MATSUSHITA, 1933 に最も近く、恐らくはこの属に属するのではないかと考えられるが、カミキリムシの専門家の方の御意見を伺いたいものである。(国立科学博物館)

○エサキクロタマムシは沖縄に産するか

エサキクロタマムシ(新称) *Buprestis esakii* Y. KUROSAWA, 1954は台湾中部のマメ社産の1♀(v. 1939, 金子富夫氏採集)とボアルン(Boarn)産の1♀(ラベルには Gōkan, 7. 1937とあるが平山修次郎氏によるとこれは誤であると云う)に基づいて、ヒマラヤに産する *B. aurantiopecta* CASTELNAU et GORY, 1837 の亜種として記載したものである。その後ヒマラヤの *aurantiopecta* の♂♀を入手し、両者を詳細に比較した結果、本種は *aurantiopecta* とは異なる独立種で、ヨーロッパに広く分布する *B. novemmaculata* LINNÉ, 1758 に近い種類であることに気付いたが、このことは未発表である。台湾では少ない種類らしく、秋山黄洋氏(本誌43号)や本号の服部宇春氏の記録があるだけで、私の知る限りでは、今までに採集された個体は2♂♂6♀にすぎない。どうやら台湾では余り高くない山地の松類に加害しているのではないかと考えられる。



Buprestis esakii
Y. KUROSAWA ♀

しかるに、昨夏、沖縄本島に赴かれた大島康平氏は1979年7月8日に南端部の知念村知念で、立枯れのリュウキュウマツの樹皮下より本種の死骸を発見し持参された。死骸は完全なものではなく、わずかに頭部、右翅鞘、左後肢などが残るのみのものであったが、翅鞘には明瞭に3個の黄色紋が浮き出し、まぎれもない本種の死骸であった。恐らくは♀であると推定されるが腹端部や前肢を欠き、はっきり決定できない。

立枯れの松の樹皮下から発見されたのであるから、流木について来たとしても、少なくとも一代を沖縄で経ているものと推定されるが、果して本種のような顕著な種類が沖縄本島に土着しているものかどうか確かめたく思っている。なお、念のため台湾産の♀の写真を示しておいた。

(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○エサキクロタマムシの採集記録

秋山黄洋氏によるとエサキクロタマムシ(黒沢良彦博士新称) *Buprestis* (s. str.) *esakii* Y. KUROSAWA, 1954 の採集記録は少ない由である(甲虫ニュース48号7頁, 1978)ので、筆者の採集記録を記しておく。

1♀, 台湾省台中県達盤橋付近, 7. vii. 1979, 服部宇春採集。

秋山黄洋氏がキンイロヒメタマムシ(黒沢博士新称) *Buprestis* (*Cypriacis*) *mirabilis* Y. KUROSAWA, 1969 を採集された地点から遠くない所で、昼ごろ斜面に沿って飛んでいたものを採集した。なお、いろいろ御教示を賜った黒沢良彦博士に深謝する。(横浜市中区, 服部宇春)

○エサキキンヘリタマムシ9月の採集例

エサキキンヘリタマムシ *Scintillatrix kamikochiana* OBENBERGER は主として7月から8月にかけての間に採集され、筆者は9月に採れた例を知らないが、今年(1980)9月5日に山梨県塩山市大菩薩嶺の日川林道で、河原のヤナギ類(種名不明)の幹に飛来した3頭を採集したので、遅い採集例として報告しておく。なお、3頭は河原の2mくらいのヤナギの木の同じ所に2度におたり飛来したものである。(東京都日野市, 中村芳樹)

○オオウグイスナガタマムシの分布北限

オオウグイスナガタマムシ *Agrilus asiaticus igai* Y. KUROSAWA. 1963 の産地は東海地方以西の西日本に偏っていたが、最近になって東日本にも分布していることが判り、東京都高尾山(1976, 藤田 宏, *Elytra*, 3, p. 27)や福島県いわき市江田(1976, 大桃定洋, *Elytra*, 4, p. 36)などから記録され、その分布は関東地方から東北地方南部にまで広がった。

私は対馬での経験で本種がアベマキのひこ生えに来ることを知っていたので、本年(1980)6月20日に仙台の渡辺 徳氏に伴われて宮城県南端部の伊具郡丸森町に赴いた際に注意したところ、アベマキに近似するクスギのひこ生えに集集している本種3♂♂9♀を同町筆甫の山林伐採地2ヶ所で採集した。また、6月23日にはさらに南の福島県原町市国見山のあかね林道でも1♀を採集しているので、本種は阿武隈山地の東側ほぼ全域に広く分布しているものと思われる。今後丸森町以北の宮城県側にどのあたりまで分布圏が広がるか興味がある。同様に阿武隈山地の内陸部にどのあたりまで分布するかも興味がある。(国立科学博物館, 黒沢良彦)

チョウセンマメハンミョウの学名

黒沢良彦

1963年に私はチョウセンマメハンミョウ（ツチハンミョウ科）の学名を *Epicauta chinensis* MOTSCHULSKY として図示した（原色昆虫大図鑑 pl. 131, fig. 9 a, b）。しかし、この扱いは全くの誤りであるので、この機会にその誤りを正し、その経緯について触れておきたい。

1936年に故河野広道博士は「日本動物分類」第10巻第8編第3号に大花蚤科・地胆科（オオハナノミ科・ツチハンミョウ科）を執筆された。その中で、博士はチョウセンマメハンミョウの学名を *Epicauta chinensis* MOTSCHULSKY とし、「対馬、朝鮮、済州島、北支部」に分布するとした。また、同時に本州中北部に産する頭部を除く全体の黒いマメハンミョウを *E. taishoensis* LEWIS とした。しかし、G. LEWIS の *taishoensis* とは「対州産の」を意味し、「大將」を意味するものではない。対州とは対馬を指している。*E. taishoensis* は対馬産のマメハンミョウであって、本州北部産のものではない。対馬産のマメハンミョウは朝鮮産の種類に一致し、本州北部の種類とは別種である。従って、本州北部のマメハンミョウに *E. taishoensis* LEWIS, 1879 を当てるのは誤りである。本州北部のものは、その分布の南限地域では翅鞘にかすかな灰白色縦条の現れるものがあり、次第に本州中西部、四国、九州に普通にいるマメハンミョウ *E. gorhami* MARSEUL, 1873 に移行し、両者は別種とする根拠に乏しい。これらの点を考慮して、私は河野博士の「クロマメハンミョウ」をマメハンミョウ *E. gorhami* MARSEUL, 1873

の北方型、*E. taishoensis* LEWIS, 1879 は朝鮮産のいわゆる「チョウセンマメハンミョウ *E. chinensis* MOTSCHULSKY」と同一種と見做し、そのまま図示してしまった。これは河野博士の扱いを検討することなく盲従した結果に他ならないが、*E. chinensis* MOTSCHULSKY と云う種類は実在しないことに気付かなかったのは私の重大な誤りであった。もし、仮りに *E. chinensis* MOTSCHULSKY と云う種類が存在したとしても MOTSCHULSKY の論文発表年代からすると1850年以前であるはずはないが、そうするとこの種名は *E. chinensis* (CASTELNAU, 1840) のホモニムとなり、どちらにしても使用出来ない。この種類は、東亜のマメハンミョウにしてはやや小型で、翅鞘に明瞭な灰白縦条を現し、黒い頭をした種類で、チョウセンマメハンミョウとは明らかな別種である。従って、チョウセンマメハンミョウの学名には *E. taishoensis* LEWIS, 1879 を復活して用いるのが妥当であろう。なお、対馬産は朝鮮産に比較して、頭部の赤色部が極端に少なく、ほとんど黒色になるものもある点で異なり、亜種として分離されるかも知れない。この場合には対馬産が原名亜種となり、朝鮮産には新名が要求されることになるであろう。

なお、マメハンミョウの北方型を別種クロマメハンミョウとし、その種名に *E. taishoensis* LEWIS を導入したのは、故村松松年博士で（日本昆虫大図鑑 p. 215, fig. 574, 1931 など）、河野博士はこれに従っただけである。

○ *Nematoides watanabei* HISAMATSU の新分布地

本種は1959年に伊豆諸島御蔵島で採集された4雄1雌の標本に基づいて久松定成氏により記載されたコマツキダマンである（1963: Trans. Shikoku Ent. Soc., 8: 31~33, fig. 6）。原記載のあと、本種は沢田・渡辺（1969）によって御蔵島から8頭が記録されているが、他の地域から採集されたという報告はない。しかしながら、筆者は八丈島で採集された標本を所持しているの、ここに



報告しておく。

2頭、八丈島末吉、3-7. viii. 1978、露木繁雄採集。末筆ながら、いつも標本を恵みいただいている露木繁雄氏に厚くお礼申しあげる。

（東京農大、鈴木 互）

○ 「日本新記録のシテムシ(2)」の訂正

筆者は前号 (p. 14) で沖縄本島からネパールモンシテムシ *Nicrophorus nepalensis* HOPE, 1841 を日本新記録種として報告したが、本種はすでに芝田太一氏によって奄美大島より記録されていた（昆虫学評論, 1969, 21 (2), p. 54）。従って、本種は、沖縄本島からは新記録であるが、日本新記録ではなかったの、ここにお詫びして訂正しておく。懇切な御指摘を頂いた黒佐和義博士および渡辺泰明氏に厚く御礼を申し上げる。

（国立科学博物館、黒沢良彦）

○シロジュウシホシテントウとジュウニホシテントウの関係

シロジュウシホシテントウ *Anisocalvia quatuordecimguttata* L. とジュウニホシテントウ *A. duodecimmaculata* GEBLER は、私は今まで別種として取扱って来た (SASAJI, 1971; 佐々治, 1977)。ところが、宮武陸夫氏は最近、飼育実験を含む詳細な比較検討の結果を公表された (昆虫と自然, 13(1): 9-16, 1978)。同氏は豊富な資料に基づいて同種と推定しているが最終的な結論を差控えており、その慎重な態度に深く敬意を表したい。一方、西カナダとアラスカのテントウムシ科をまとめた BELICEK (1976) は CASEY (1899, 1924) の記載した8種のタイプ標本をはじめ1000個体以上の標本を調べ、野外での交尾関係も参考にした上で、*duodecimmaculata* を含む14種を *quatuordecimguttata* のシノニムとしている。これらが遺伝的多型であることを立証するためには計画的な交配実験が必要であろうが、宮武 (1978) に示された資料や BELICEK (1976) の見解から、少なくとも文頭に示した2つは分類学的には同種として扱うのが妥当であろう。ただし、野外での交尾観察や、雑種形成だけから同種と結論することは危険であることを付け加えておきたい。

(福井大学, 佐々治寛之)

○ハナカミキリ2種の棲み分け傾向の一例

カミキリムシの高度による棲み分け現象の報告は、筆者の知る限りヒメハナカミキリ属をのぞいては、ほとんどないが、1978年8月6日、長野県木曾郡御岳 (3063m) にて、ブチヒゲハナカミキリ *Corymbia variicornis* (DALMAN) とイガブチヒゲハナカミキリ *C. igai* (TAMANUKI) の2種に棲み分け傾向が見られたので報告する。

調査範囲：木曾御岳、田の原(高度約2100m)～清滝(高度約1200m)までの御岳黒石林道ぞいと、王滝村鈴ヶ沢(高度約1200～1300m)。

調査時間および状況：AM. 9:00～PM. 4:00頃

花は高度により開花状態は異なるが、ノリウツギ3分咲き～散りかけ、リュウブ8分咲き～満開、が主なものであった。

ブチヒゲハナカミキリ採集総数 15頭。

9頭、田の原(高度約2100m)～八海神社上部(高度約1700m)；6頭、八海神社付近(高度約1650m)。

イガブチヒゲハナカミキリ採集総数 5頭。

2頭、八海神社付近(高度約1659m)～清滝(高度

約1200m)；3頭 鈴ヶ沢(高度約1200～1300m)。

採集頭数が少ないため、加藤昭見、斎藤孝夫両氏の記録も参考にさせていただいたが同結果であった。

このことより、狭い範囲である事と、データのにもいささか不足きみではあるが、八海神社付近を境とするブチヒゲハナ、イガブチヒゲハナ両種の棲み分け傾向がみられると判断した。なお、この範囲の樹相は、八海神社をほぼ境として低標高では、ミズナラ、コナラ、クリなどを中心とする闊葉樹林帯、高標高では、カラマツ、ツガ、トウヒなどを中心とする針葉樹林帯とに区別することができた。

文末ではあるが、本稿を製作するにあたり御教授いただいた早川広文氏、イガブチヒゲハナ、ブチヒゲハナカミキリのデータを参考とさせていただいた加藤昭見、斎藤孝夫氏に御礼申し上げる。

(名古屋市緑区, 湯沢宣久)

=連続・報告>=

◇「日本産甲虫目録第4輯」の販売

かねて印刷中の上記出版物が、今度ようやく発行の運びとなりましたので、内容および販売方法等についてお知らせ致します。

No. 18 ハムシ科 [サルハムシ亜科] (木元新作) 10頁；No. 19 カミキリムシ科 [ハナカミキリ亜科] (林 匡夫) 28頁。

このシリーズの No. 18 および No. 19 は分冊せず、第4輯として一括販売することとし、販売に関しては既刊分と同様、東京通販サービス社にすべて委託することになっていますので、購入を希望される方は直接同社宛にお申し込み下さい。

販売価格は1セット (No. 18～No. 19) ¥1,500 (送料別 ¥200) ですが、会員は同封の割引券を利用すれば (1回限り) ¥1,200 (送料別) で購入することが出来ます。なお、東京通販サービス社への連絡は下記の通りです。

〒156 東京都世田谷区千歳局私書箱33号

Tel. (03) 426-6012 郵便振替 東京0-73, 156 東京通販サービス社

甲虫談話会

会費 (一カ年) 1500円、次号は1月30日発行予定。

投稿〆切は12月30日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号 (各号100本180円)

なお、有頭針00, 0号もできました。その他、採集、標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都内及第一地帯：3個以下 ¥1,400, 4個以上 ¥850 (以下同様), 第2地帯 ¥1,400, ¥950, 第3地帯 ¥1,600, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥140)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-212-25

電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479